

JAPAN RESEARCH JOURNAL OF RUGBY FORM

No.18 (Supplement) March 2025

ラグビーフォーラム

令和7年3月

日本ラグビー学会

Japan Society of Rugby

# 日本ラグビー学会第 18 回大会

令和 7 年 3 月 8 日 (土)

会 場：関西学院大学

西宮上ヶ原キャンパス G キャンパス

兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1-15

## 目 次

1. 大会案内
2. 大会スケジュール
3. 発表案内
4. 基調講演
5. シンポジウム
6. 一般発表（口頭）タイムスケジュール（抄録）

# 大阪体育学会第 63 回大会のご案内

## 大会テーマ

### 「子どもの成長を育む健康・スポーツ」

1. 日程 令和 7 年 3 月 8 日（土）10：00～16：40（受付 9：30）
2. 会場 関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス G 号館  
〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1-155
3. 大会概要
  - 1) 一般研究発表：10：10～ G201 教室、G301 教室
  - 2) 特別企画：学部生ポスター発表：11：40～ G207 教室
  - 3) 総会（13：00～13：50）G302 教室
  - 4) 基調講演 G301 教室  
テーマ「子どものからだと心が求める遊び」  
演者：野井真吾（日本体育大学教授）
  - 5) シンポジウム G301 教室  
テーマ「子どもの運動・スポーツにおける環境、現状」  
シンポジスト：
    - （1）秋武寛（西南学院大学准教授）  
「幼児期における運動能力、身体活動量、睡眠の調査研究の取り組み」
    - （2）木下岳（兵庫県立兵庫工業高等学校・保健体育教諭）  
「部活動の環境について一学校現場の視点から」
    - （3）赤城 誠 先生（元 MBS アナウンサー）  
「実況アナウンサーが感じる、高校ラグビーの移り変わり」
    - （4）吉矢 晋一（西宮回生病院 日本ラグビー学会副会長）  
「現在の子どものスポーツスポーツ医の視点から」司 会：灘英世（関西大学教授）  
指定討論者：西田順一（近畿大学教授）

## 1. 大会スケジュール

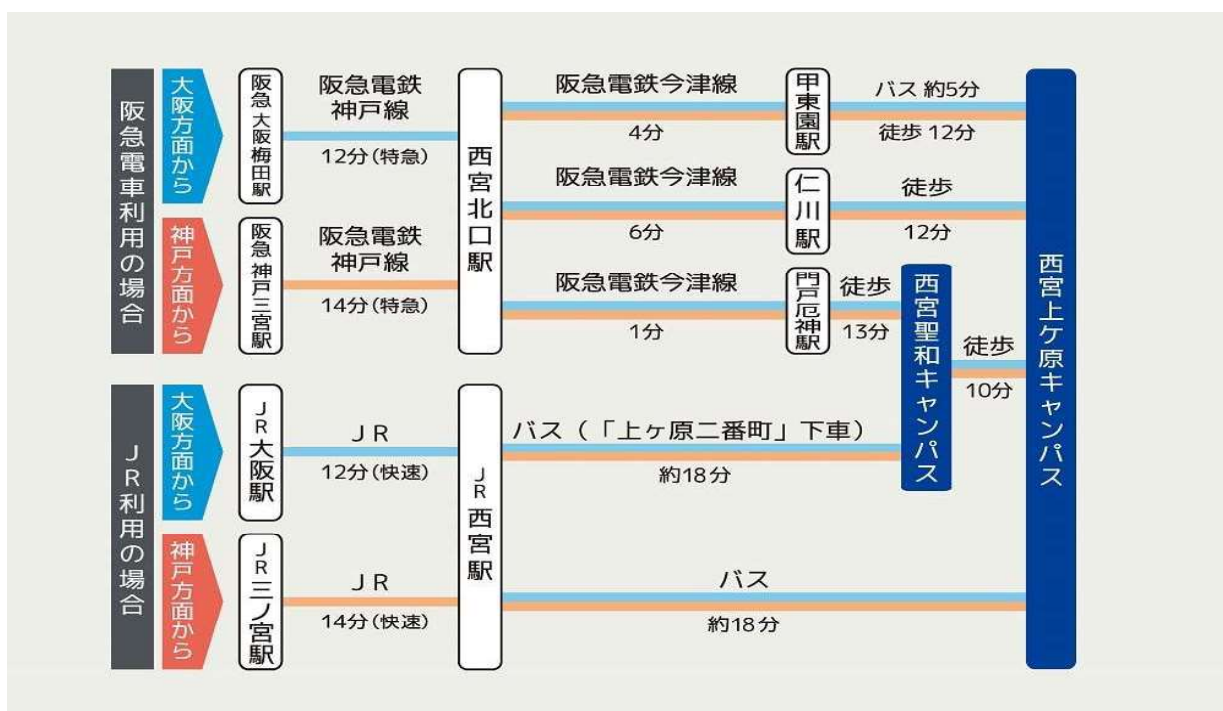
受付	・・・・・・・・・・・・・・・・	9:30	～	G棟
開会式	・・・・・・・・・・・・・・・・	10:00	～	G301 教室
一般発表	・・・・・・・・・・・・・・・・	10:10	～	G302 教室
理事会	・・・・・・・・・・・・・・・・	12:00	～	G302 教室
総会	・・・・・・・・・・・・・・・・	13:00	～	G302 教室
基調講演	・・・・・・・・・・・・・・・・	14:00	～	G301 教室
シンポジウム	・・・・・・・・・・・・・・・・	15:20	～	G302 教室
閉会式	・・・・・・・・・・・・・・・・	16:40	～	G302 教室
懇親会	・・・・・・・・・・・・・・・・	大会終了後		

## 2. 大会案内

### a. 会場

- ・ 関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス G 号館

関西学院大学の正門から教育懇談会会場(受付:G号館)までの経路は以下のとおりです。



## 阪急電車をご利用の場合

### 大阪梅田駅から

- **大阪梅田駅～甲東園駅**  
阪急神戸本線特急(新開地方面)に乗り、「西宮北口」駅で阪急今津線(宝塚方面)に乗り換え「甲東園」駅で下車。阪急バスで「関西学院前」下車(約5分)。もしくは徒歩約12分。タクシー約5分(700円前後)
- **大阪梅田駅～仁川駅**  
阪急神戸本線特急(新開地方面)に乗り、「西宮北口」駅で阪急今津線(宝塚方面)に乗り換え「仁川」駅で下車。徒歩約12分。

[バスの時刻表徒歩でのルート](#)

### 神戸三宮駅から

- **神戸三宮駅～甲東園駅**  
阪急神戸本線特急(新開地方面)に乗り、「西宮北口」駅で阪急今津線(宝塚方面)に乗り換え「甲東園」駅で下車。阪急バスで「関西学院前」下車(約5分)。もしくは徒歩約12分。タクシー約5分(700円前後)
- **神戸三宮駅～仁川駅**  
阪急神戸本線特急(新開地方面)に乗り、「西宮北口」駅で阪急今津線(宝塚方面)に乗り換え「仁川」駅で下車。徒歩約12分。

[バスの時刻表徒歩でのルート](#)

## JRをご利用の場合

### 大阪駅から

JR 神戸線快速(加古川方面)に乗り、「西宮」駅で下車。阪急バス(甲東園行き)で約15分。「関西学院前」下車すぐ。

[バスの時刻表](#)

b. 受付

- ・総合受付場所:G棟教室 受付時間:9:30-14:00
- ・大会参加費等  
会員 1,000円 学生 無料 一般 無料
- ・必ず受付で入場手続きを行ってください。
- ・学会入会手続きも、総合受付で行っております。

d. 諸注意事項

- ・学内では係員の指示に従ってください。
- ・会場内での携帯電話等の使用を禁じます。
- ・喫煙は所定の喫煙所にてお願いします。
- ・貴重品はお預かりしません。手荷物の管理は各自でお願いします。
- ・大会事務局では盗難や事故について一切の責任を負うことはできません。

e. 大会実行委員会

大会長 石指宏通（奈良県立医科大学）

委員長 灘英世（関西大学）

副委員長 吉矢晋一（西宮回生病院）

委員 青木敦英（芦屋大学）、入江直樹（滋賀大学）、岡本昌也（愛知工業大学）

川端泰三（関西大学）、北畑幸二（有限会社北畑産業）、

高木應光（神戸外国人居留地研究会）、山田光昭（大阪公立大学）



### 3. 発表案内

#### a 発表方法

- ・発表は口頭で行います。

#### b. 進 行

- ・発表者は各セッションとも座長の司会によって進行します。座長の指示を遵守してください。

#### c. 発表時間

- ・発表時間「10分」・討論「5分」の合計「15分」です。ただし、フロアから活発な質問等のある場合には、座長の裁量で討論時間の調整を行ってください。時間厳守でお願いします。

#### d. 資料配布

- ・資料を配布される方は、各自で準備し、大会当日に持参のうえ、発表受付担当者に提出してください。50部を準備してください。

#### e. 機器使用

- ・PCはこちらで用意します。発表データを「30分」前までにUSB等でお持ちください。ご自身のPC：可

#### f. 発表取消

- ・プログラムに掲載されている発表者が、不測の事情によって欠席せざるをえない事情の生じた場合には、大会事務局にできるだけ早くご連絡ください。連名発表の場合には、連名者が、大会本部の承認を得て発表を代行することができます。

#### g. 座長要領

- ・座長は、各発表会場受付で、受付を行ってください。座長は開始「20分」前までに必ず受付を済ませてください。座長は、フロアからの質疑等を促し、研究発表の円滑な運営が進行するようにご協力をお願いします。

## 4. 基調講演

「子どものからだと心が求める遊び」

野井 真吾

(日本体育大学教授)



【プロフィール】野井真吾/Shingo Noi

日本体育大学大学院体育科学研究科博士後期課程修了。博士（体育科学）。東京理科大学専任講師、埼玉大学准教授、日本体育大学准教授を経て現職（日本体育大学教授）。日本体育・スポーツ・健康学会代議員、日本学校保健学会代議員、日本教育保健学会副理事長、日本幼少児健康教育学会副理事長、日本発育発達学会 理事。

主著に『子どもたち 5000 人に聞いた！学校で大切なこと：教育保健学から学校を再定義する』（大修館書店）、『子どもの“からだと心”クライシス』（かもがわ出版）、『子どものからだと心白書』（ブックハウス・エイチディ）、『めざせ！からだはかせ 全4巻』（旬報社）、『からだの元気大作戦！』（芽ばえ社）などがある。

#### 【講演要旨】

近年、Society 5.0 時代、AI 社会時代に向けた動きが一気に加速している。ただ、われわれは仕事をしているときも、学んでいるときも、遊んでいるときも、生活をしているときも“からだ”を使っている。そのため、いつの時代のどの世代の人々にも“からだ”が重要であることは誰もが認めることである。ところが日本では子どもの“からだ”が「どこかおかしい」「ちょっと気になる」と実感されて随分長い年月が経過してしまった。そのような実感に導かれて行われてきたわれわれの実態調査の結果では、前頭葉機能、自律神経機能、睡眠・覚醒機能といった神経系の発達不全と不調が確認されている。また、いじめ、不登校、自殺、オーバードーズ、ネット依存等といった問題も山積である。さらに、昨今のコロナ禍である。この事態を受けて、子どものからだと心・連絡会議と日本体育大学体育研究所により行われた「コロナ休校緊急調査」では、コロナ休校中の子どもたちが「(思うように) 外に出られないこと」「友だちに会えないこと」に困っていた様子が示された。考えてみれば、ヒトは動物である。動物は「動く物」と書くように、元来、動かなければヒトにも人間にもなれない。また、ヒトは人間でもある。人間は「人の間」と書くように、家族や仲間とともに協力、共存しながら進化してきた。つまり、私たち人類は「動いてヒトになり、群れて人間になる」のである。このことは、Society 5.0 時代、AI 時代が到来しても同じである。むしろ、そのような社会になればなるほど、動くこと、群れることが制限されてしまうことは、この間のコロナ禍で嫌というほど経験してきた。だとすれば、そのことの重要性をこれまで以上に強く自覚しておく必要があるように思う。いずれにしても、子どもの“からだと心”は、動くこと、群れることが必然的に内包されている「遊び」とそれに象徴される子ども時代を確実に保障することを求めている。昨年（2024 年）は、国際連盟で「子どものための権利宣言（ジュネーブ宣言）」が採択されて 100 年、国際連合がこの宣言を「子どもの権利条約」に発展させて 35 年、日本がそれを批准して 30 年の節目の年に当たる。また、同年 3 月 25 日には、毎年 6 月 11 日を「国際遊びの日」にすることが国連総会の全会一致で採択されてもいる。そのような節目を迎えて、本報告では子どもの“からだと心”の視点から、もう一度「遊び」に注目してみたい。

## 5. シンポジウム

(15:20 ~ 16:40)

「子どもの運動・スポーツにおける環境：現状、課題、展望」

司 会：灘 英世（関西大学）

指定討論者：西田 順一（近畿大学）

### 【シンポジスト】

秋武 寛 （西南学院大学）

「幼児期における運動能力、身体活動量、睡眠の調査研究の取り組み」

木下 岳 （兵庫県立兵庫工業高等学校）

「部活動の環境について - 学校現場の視点から - 」

赤木 誠 （元MBSアナウンサー）

「実況アナウンサーが感じる、高校ラグビーの移り変わり」

吉矢 晋一（西宮回生病院 日本ラグビー学会副会長）

「現在の子どもとスポーツ - スポーツ医の視点から - 」



秋武 寛/Hiroshi Akitake

西南学院大学人間科学部児童教育学科准教授

#### 【プロフィール】

大阪教育大学保健体育講座 修士（教育学）修了、日本体育大学大学院博士後期課程博士（体育科学）修了。プール学院短期大学部幼児教育学科（特任講師）、びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部スポーツ学科、スポーツ学研究科大学院（准教授）を歴任し、現在は西南学院大学人間科学部児童教育学科（准教授）で勤務している。専門は、発育発達学、運動生理学、スポーツバイオメカニクス。

#### 【シンポジウム発言要旨】

「幼児期における運動能力、身体活動量、睡眠の調査研究の取り組み」

子どもの運動能力の低下は、社会的問題になっています。2020年以降も新型コロナウイルスの影響で、子どもの体力低下は、さらに拍車をかけてきています。私は、これまで子ども（幼児、児童）を対象に、運動生理学的観点から運動能力、身体活動量、睡眠、骨密度、肥満、自律神経（ストレス）、生活習慣、スポーツバイオメカニクスの観点から運動動作、足（扁平足、足の形状）の研究を行っています。特に幼児を対象に毎年、継続的に、運動能力、身体活動量、睡眠などを中心に、様々な調査を行っています。

これらの様々な継続的なデータから、少しではありますが、子どもたちの運動能力低下の問題を解決する一助となれば幸いです。子どもたちから頂いた様々な運動能力、身体活動量、睡眠などのデータを中心に、子どもたちからのメッセージを読み取り、お越しいただいたみなさまとの議論を楽しみにしています。



木下岳／Gaku Kinoshita

兵庫県立兵庫工業高等学校保健体育教諭

### 【プロフィール】

関西学院大学人間福祉学部卒業。神戸大学大学院人間発達環境学研究科修了（修士）。2017-2023年兵庫県立西宮甲山高等学校保健体育教諭。同校ラグビー部顧問4年、硬式野球部顧問2年。2023年4月から兵庫県立兵庫工業高等学校保健体育教諭（現在に至る）。同校女子ハンドボール部顧問1年、硬式野球部2年。選手としては2009年度第91回全国高等学校野球選手権大会に出場（関西学院高等部、ポジションはセカンド）。2012年および2013年関西学生野球連盟秋季リーグ優勝に貢献（関西学院大学体育会硬式野球部）。

### 【シンポジウム発言要旨】

「部活動の環境について - 学校現場の視点から」

部活動を取り巻く環境について、部活動の地域移行や教員の負担軽減などが大きなテーマとなっています。神戸市の中学校では、2026年度に部活動を終了し、生徒が地域の方々とともに活動する「神戸の地域クラブ活動」＝「KOBE◆KATSU」（コベカツ）を開始します。指導者の確保、自治体間の格差、経済的負担の増加など、たくさんの課題があると感じています。

教員の負担軽減については、部活動ガイドラインにある週2日以上（土日どちらか1日を休養日）の休養日、活動時間は平日2時間程度、土日3時間程度とありますが、ガイドラインを遵守する自治体や学校間に差が生まれているのが現状です。



赤木 誠/Makoto Akagi

元MBS アナウンサー

### 【プロフィール】

九州大学卒業。1981年MBS毎日放送入社。以降、2023年10月までスポーツアナウンサーとして在籍。阪神タイガースを主としたプロ野球、センバツ高校野球、高校ラグビー、陸上、ボクシング等を担当。JNN・JRN アノンシスト賞スポーツ実況部門で最優秀賞3度受賞。高校ラグビー花園大会ラジオ実況、阪神優勝ラジオ実況、高校ラグビー花園大会決勝TV実況など。現在もスポーツアナウンサーとして、ラグビー、野球の実況、MBSラジオへの出演、イベント司会などで活動中。

### 【シンポジウム発言要旨】

「実況アナウンサーが感じる、高校ラグビーの移り変わり」

私が高校ラグビーの実況を始めた約40年前、今では信じられない話ですが、トライした選手をアップで映すな、過度に褒めるなという不文律が存在していました。また、指導者側の先生も、ガッツポーズ厳禁、「トライさせていただいて有難うございます」という、感謝の気持ちをまず持てという指導をされていました。ところが、現在は、トライした選手は大映し、実況は、これでもかと称賛の嵐、まさに180度変わりました。個の時代、競技人口の減少、教育の一環から数字（視聴率）偏重へと変化してきた放送局など様々な背景があります。そのあたりを、長年お付き合いさせていただいた指導者の先生方とのエピソードを交えながら、又、高校スポーツ中継に於いて自分自身がこだわってきたことも合わせてご紹介できればと考えています。



吉矢晋一/Shinichi Yoshiya

西宮回生病院整形外科センター顧問

日本ラグビー学会副会長

#### 【プロフィール】

神戸大学医学部卒業。1984-86年米国クリーブランドクリニック整形外科留学。1986-1988年神戸大学附属病院整形外科助手。1988-2002年明和病院整形外科。2002-2005年神戸大学医学部運動機能学（整形外科）助教授。2005-2019年兵庫医科大学整形外科学教室教授。2019年4月から西宮回生病院顧問整形外科。専門はスポーツ医学、膝関節。関西学院大学・高校アメリカンフットボール部チームドクター。兵庫県スポーツ推進審議会委員。日本ラグビー学会副会長

#### 【シンポジウム発言要旨】

「現在の子どもとスポーツ - スポーツ医の視点から -」

子どもとスポーツに関する問題に「スポーツをしない子どもと、し過ぎてしまう子どもの二極化」というテーマがあります。スポーツをしないということは、運動をしないために発育段階での運動能力の発達が不十分となり「最近の子どものろび方が下手でケガをしやすい」などという問題につながります。また、運動不足の子どもが大きくなって高齢者になっていくと、加齢とともに起きる運動機能の低下（ロコモティブシンドロームと言われます）が、現在よりも顕著に起きるのではないかと、ということが危惧されます。

もう一方の、スポーツし過ぎの子どもについては、成長期でのスポーツ障害の発生という問題につながる可能性があります。成長期の子どもには、大人に比べてケガや故障の治りが早いという長所もある一方で、成長過程であるがゆえの弱点（障害発生の要因）もあります。一部のスポーツで過熱気味な世の中の潮流もある中で、ケガや故障から子どもたちを守る取り組みもスポーツ医の側で続ける必要があると感じています。





司会：灘英世／Hedeoyo Nada

関西大学人間健康学部教授 日本ラグビー学会理事長

#### 【プロフィール】

大阪体育大学卒業。1980-198年大阪体育大学特別研究生。1981-1983年大阪体育大学助手。1984年一般企業就職。2009年関西大学文学部助教。2012年関西大学人間健康学部准教授。2018年4月から関西大学人間健康学部教授（現在に至る）。専門は運動学、安全教育。



指定討論者：西田順一／Junichi Nishida

近畿大学経営学部教授

#### 【プロフィール】

九州大学大学院修了（修士）。2000年3月九州大学人間環境学研究科修了（博士）。2004-2006年福岡大学スポーツ科学部助手。2006-2007年九州大学大学院人間環境学府博士研究員。2007-2010年群馬大学教育学部准教授。2017-2020年近畿経営学部准教授。2020年4月から同教授（現在に至る）。専門は運動や身体活動および体育教育の有効性に関する心理学的研究。特に、運動に伴うメンタルヘルス効果や身体教育に伴う恩恵や影響などを検討している。

## 6, 一般発表（口頭）抄録

会 場 : G202 教室 タイムテーブル

座長 : 岡本 昌也 (愛知工業大学)

A-1 10:10 - 10:25

旧制・甲南高等学校がはぐくんだ人材

世界的数学者・角谷静雄、経済界でグローバルに活躍した・平生三郎

○ 高木 應光 (神戸居留地研究会)、西村 克美 (明治国際医療大学)

A-2 10:30 - 10:45

ラグビー日本代表ヘッドコーチの選手育成に関する研究

○ 高岡 慎一郎 (甲南大学ビジネス・イノベーション研究所)

座長 : 高木 應光 (神戸居留地研究会)

B-1 10:50 - 11:05

ジャパンラグビーリーグワン観客数から見た興行化成功の検証

○ 高津 浩彰 (豊田工業高等専門学校)、岡本 昌也 (愛知工業大学)

B-2 11:10 - 11:25

スポーツ集団における不祥事に対する外集団評価について

○ 高田 正義 (愛知学院大学)、岡本 昌也 (愛知工業大学)、他 3 名

## 旧制・甲南高等学校がはぐくんだ人材

世界的数学者・角谷静雄、経済界でグローバルに活躍・平生三郎

高木應光 西村克美

文武両道こそ、スポーツ選手の理想である。かつて旧制高校に学び、ラグビー部で活動、のちに世界的な活躍をした2名にスポットを当ててみる。旧制7年生・甲南高等学校出身、角谷静夫、平生三郎の2名である。

文武両道こそ、スポーツ選手の理想である。かつて旧制高校に学び、ラグビー部で活動、のちに世界的な活躍をした2名にスポットを当ててみる。旧制7年生・甲南高等学校出身、角谷静夫、平生三郎の2名である。

世界的数学者・角谷静夫

角谷は、1911年8月生まれ。1925年に甲南高等学校・尋常科に入学、ラグビー部に入部する。創部わずか2年目、20名ばかりの部員であった。旧制甲南高等学校は創設者平生三郎が語る「人格の修養、健康の増進を第一義とし、個性を尊重して天賦の才の知能を啓発すべき知的教育を施さん」という教育方針の下、学校生活を送った。数学の学力が優れていた角谷だが、当初文系であった。進路を決めるにあたり、文系から理系・数学科に志望を変えたが、校長が頑として変更を許さない。角谷は「個性尊重」の校是を曲げず、ラグビー部の盟友とともに食堂横の煙突に登り、抗議のハンガーストライキを敢行し、校長の許可を得る。東北大学で数学の才を開花させ、卒業後角谷はアメリカにわたり、本格的に研究生生活をスタートさせる。1年後に日米開戦。角谷は一時帰国したが、終戦後再びアメリカにわたり、イエール大学で教授に昇進、数学者の頭脳流出第1号といわれた。数学者としての評価は高

いのはもちろん、人間的にも魅力の高い人であり、多くの人に応援された人生であった。

国際ビジネスの世界で活躍・平生三郎

平生は1911年2月生まれ。旧制・甲南高等学校の創設者、平生三郎の三男である。三郎は高等科1年よりラグビーを始める。創部間もない時期で、部員不足にも悩まされた。三郎は卒業後、京大に進学。1年生からレギュラーを務め、このシーズン、京大は、3年連続全国制覇を成し遂げた。2年生の時、全日本チームに選出され、カナダ遠征に参加する予定であったが、父・三郎が学業優先を厳命、参加できなかった。翌シーズン、全カナダが来日、三郎は3試合に出場している。

卒業後、呉羽紡績に入社。戦後、会社はエルサルバドルに進出、戦後日本初の海外進出合併事業となった。三郎は、現地に溶け込み、その国の繁栄に寄与した。また、エルサルバドルの人々の生活向上に注力した。しかしながら、1973年3月にパナマにおいて、急死してしまう。三郎は東洋紡（呉羽紡績を買収）の副社長であり、会社は三郎の功績を顕彰するために、50万ドルを拠出し、エルサルバドルの首都、サンサルバドルに「ヒラオ・サブロウ公園」を造成した。

まとめ

旧制・甲南高等学校の創設者、平生三郎の校是、「個性尊重」、「世界に通用する紳士たれ」といった教育方針、そして、それを具現化したラグビー部の活動が、個性的な卒業生を生んだといえるのではないだろうか。

## ラグビー日本代表ヘッドコーチの選手育成に関する研究

高岡慎一郎（甲南大学ビジネス・イノベーション研究所）

### 【キーワード】 日本代表 ヘッドコーチ 人材育成 70-20-10の法則

#### 1. 本研究の目的

2007年以降、カーワン(John Kirwan)、ジョーンズ(Eddie Jones)、ジョセフ(Jamie Joseph)がヘッドコーチの役割を担ってきたが、その間、日本代表の世界ランキングは上昇傾向にある。本稿の目的は、ヘッドコーチが行ってきた選手育成について経営学的な観点から整理し、理解を深めることである。

#### 2. 先行研究

経営学における人材開発分野では「70-20-10の法則」がよく知られている。これは、育成効果の70%は仕事経験、20%は薫陶（上司など他者との関係）、10%は研修によるというものである（Lomberdo & Eichinger（1996））。

#### 3. 調査対象と分析方法

調査対象は、ラグビー日本代表のヘッドコーチを務めた前述の3名であり、データは一般情報を二次資料分析しているものである。手法としては、質的分析方法を参考に分析を行った。

#### 4. 分析結果

調査対象の3人の行動データを分析した結果、「仕事経験」「薫陶」「研修」にそれぞれ相当すると思われるのは、「グラウンドにおける指導」「明確な目標に基づいた鼓舞」「日本文化を基盤とした多様性尊重」であった。

#### 5. 考察

「70-20-10の法則」は企業経営において、人材育成施策を検討する際に活用されるフレームワークであるが、ラグビー日本代表の選手育成にも違和感なく該当することが分かった。

この背景としては、ラグビーという競技の特徴や、ラグビー日本代表の組織運営が、会社における実務や企業経営との共通点を多く持つことにあると想定される。

それゆえ、企業における人材育成施策の要素は、ラグビー日本代表の選手育成にも参考になる可能性があると考えられる。

#### ①トレーニング

階層別・スキル・ニーズ別研修などの枠組み、e-learning、マネージャー研修、リーダーシップ研修、トレーニー派遣、語学研修、留学等

#### ②組織アセスメント

エンゲージメントサーベイ、ストレスチェック等

#### ③エンゲージメント向上支援

キャリア面談、希望調査、心理的安全性担保に資する施策等

図：70-20-10とヘッドコーチの選手指導行動

70-20-10の法則	ヘッドコーチの選手指導行動
仕事経験	グラウンドにおける指導 (具体的な技術指導、タフだが合理的な練習メニュー、競争を促進する選手起用等)
薫陶	明確な目標に基づいた鼓舞 (世界レベルの要求、目標と現実の具体的な明示、1対1の個別面談等)
研修	日本文化を基盤とした多様性尊重 (武士道、ジャパソウエイ、ONE TEAMを実現するためのワークショップ等)

出典：著者作成

#### 6. まとめ

本研究は選手育成の要素を経営学的観点から整理したものであるが、サンプル数が少ないこと、一般情報によるものであること、質的な探索的調査となっていることにより普遍性には乏しい。改善の余地があるため、今後の課題としたい。

以上

## ジャパンラグビーリーグワン観客数から見た興業化成功の検証

高津浩彰（豊田工業高等専門学校） 岡本昌也（愛知工業大学）

【キーワード】リーグワン トップリーグ 興業化 観客数

### 1. はじめに

日本におけるプロ化されたスポーツは野球から始まり、サッカー、バスケットボールなど様々な団体スポーツに波及している。スポーツ事業の興業化は、スポーツ種目の維持・発展のために必要不可欠なことである。

ラグビーでも興業化が進み、トップリーグより移行、「一般社団法人ジャパンラグビーリーグワン」が発足し2022年1月に試合がスタートした。リーグワンの試合ではトップリーグ時代に比べ、選手・コーチ・スタッフ・運営団体のプロ化がより進み、同時に競技レベルも上がり多くの観客が試合観戦に訪れるようになったと考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究では、ジャパンラグビーリーグワンによる興業化の成功について観客数から考察する。観客数はチケット販売に影響する基礎データである。観客数の増加は興業化の成功と考える。

### 3. 研究の方法

リーグワンディヴィジョン1の試合における総観客数について、ジャパンラグビーリーグワンのホームページよりデータを収集し、その変化についてシーズン別にグラフに示し考察を加える。また、トップリーグとの比較を行うため2011～2021シーズンまでのトップリーグと2022シーズンリーグワンの総観客数について調査し比較する。リーグ戦とその後の優勝決定のためのトーナメント戦の観客数について調査した。次年度シーズンのための順位決定戦や入れ替え戦の観客数は除外した。トップリーグから移行して観客数が増加していれば興業化が成功していると考えられる。リーグワンにはディヴィジョン1～3まで23チームが所属しているが、本研究ではトップレベルの最上位カテゴリーディヴィジョン1の12チームについて着目する。12チームに限定するのは、トップリーグの参加チーム数とできるだ

け試合数を同じにし観客数を比較するためである。

### 4. 結果と考察

図1に2011シーズンから2023-24シーズンまでの総観客数の変化について示す。トップリーグの2015シーズンと2019シーズン、リーグワンの2023-24シーズンは総観客数が他のシーズンに比べて多かった。ワールドカップでラグビーの情報がテレビ放送やニュースで取り上げられることが多かった年である。日本代表チームの活躍が様々なメディアで話題として取り上げられ、メディア露出の影響でワールドカップ終了後も観戦に訪れる人々が増加したと考える。世界での日本代表の活躍やメディアでの話題提供がその後のシーズンの試合の観客数へ影響すると考える。

一方、リーグワン開始シーズンはコロナ感染症の影響で試合の中止もあり観客数は前年トップリーグシーズンよりも大幅に落ち込んだ。コロナ感染症の影響がおさまった2022-23シーズンはトップリーグ後半並に観客数が回復した。また2023-24シーズンは、トップリーグ時の約1.5倍の90万人以上の総観客数になり過去最高を記録した。このような結果からリーグワンは事業として成功している可能性があると考えられる。

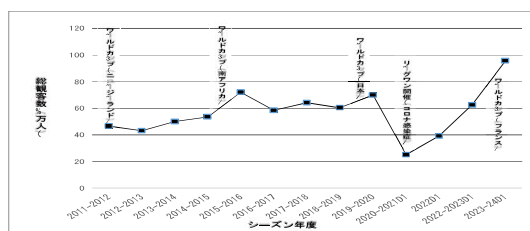


図1 総観客数の変化

### 5. まとめ

本研究の結果から、トップリーグ時に比べて総観客数がリーグワンでは増加していることが確認された。興業化が成功している可能性が示唆された。

## スポーツ集団における不祥事に対する外集団評価について

高田正義（愛知学院大学）、岡本昌也（愛知工業大学）、寺田泰人（桜花学園大学）、  
早坂一成（名古屋学院大学）、高津浩彰（豊田工業高等専門学校）

キーワード：連帯責任、同志集団、実体性、内集団、外集団、個人責任

### 【目的】

「運動部の不祥事に対する連帯責任について」は、本学会第17回大会（2024年）にて発表した。前回は、自由記述による回答から内容を検討した。今回は前回の内容を踏まえ、連帯（内集団）責任評価尺度を作成し調査を行なった。

海外の先行研究により同志集団（the like-minded group）や実体性（entitativity）の高い集団に対しては、成員の行為に関する責任が集団に帰属され（Denson, Lickel, Curtis, Stenstrom & Ames, 2006）、連帯責任も強く帰属されることが示されている（Lickel, Schmader & Hamilton, 2003）。このような視点で研究されているものは、国内では見当たらない。そこで、本研究は実体性の高い集団は、外集団からの連帯責任が強く帰属されることを仮説とし検証する。また、そのプロセスを解析することを目的とする。

### 【手続き】

対象者：大学生108名を対象とした。

調査内容：連帯（内集団）責任評価尺度を作成し実施した（図1参照）。

処理：1、因子分析

2、実体性（高群×低群）によるT検定

3、媒介プロセス分析

### 【結果と考察】

因子分析によって、7因子が抽出された。これらの因子に対して実体性によるT検定を施したところ、3因子に対して実体性高群に有意差が検出された。また、連帯責任の必要性においても、有意傾向が示された。これらのことより、実体性が高い集団は外集団による連帯責任の必要性が高まることが示唆された。

媒介プロセス分析により連帯責任を回避する方法として、個人責任を選択することが示唆された。詳細な内容は、当日の発表にて行う。

### 図1 連帯（内集団）責任評価尺度

Q1 このチームの場合、連帯責任は必要でしょうか

Q2 このチームにはどのような印象があるように思いますか

A	メンバーは、チームの行動に強く同調している
B	メンバーは、お互いに交流頻度がとても高い
C	メンバーは、同じ目標を持って練習をしている
D	チームには、事件を止められなかったという重大な責任がある
E	メンバーは、意図的に事件を隠していた可能性が高い
F	チームには、事件を見逃していたという重大な責任がある
G	メンバーは、意図的に事件を放置していた可能性が高い

Q3 その理由について、以下の設問に答えてください。

1	メンバーは、チームのために行動する必要がある
2	チームが成り立つためには、責任を共有する必要がある
3	当事者個人の責任にすればよい
4	個人の身勝手な行動は、控える必要がある
5	個人の過ちは、チームで改善する必要がある
6	個人のミスを、全体のミスにしても不満が残るだけである
7	個人の行動は、チームに影響を与える
8	チームの環境や文化にも、過ちを犯す原因がある
9	チームで情報共有するだけで、全体で責任を取る必要はない
10	チームの規律は、全員が守る必要がある
11	個々の責任感が増すことで、チームワークが強くなる
12	何もしていない者にとっては、迷惑である
13	無関係だと感じているなら、見て見ぬふりをしている
14	団体種目であるなら、当然チーム全体の責任になる
15	全体の責任にすれば、当事者のいじめにつながる
16	チームとして、仲間意識を高める必要がある
17	責任を共有すれば、過ちを犯す人が減る
18	当事者のみに責任を取らせるべきである
19	個人の勝手な行動は、他のメンバーに迷惑が掛かる
20	チームで過ちを犯したなら、チーム全体の責任である
21	チーム全体で責任をとっても、無意味である
22	チームには、ある程度の緊張感が必要である
23	互いの考えを、理解し合う環境が必要である
24	反省することは必要だが、チーム全体に責任はない
25	問題が起きる前に、チームで防ぐ対策を立てる必要がある
26	他者に迷惑を掛けないという責任感が必要である
27	無関係な人に、責任を取らせるべきではない
28	見て見ぬふりをしている人にも、責任がある
29	同じチームに所属するなら、チーム全体の責任になる
30	全体の責任にすれば、当事者は居場所がなくなる

日本ラグビー学会 第18回

学会大会事務局

〒590-8515 大阪府堺市堺区香ヶ丘町1-11-1

関西大学 堺キャンパス（灘研究室内）

日本ラグビー学会第18回大会事務局      072-229-5483

学会当日（2015/3/8）

関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス

灘      : 090-5094-4470